図書館情報メディア研究第３巻１号１～17ページ　　2005年

フンボルトの「内的な言語形式」について

（感性はしかしそれについて欺かれない…－ W.v. フンボルト－）

遠　藤　龍　二*

Zum Begriff der inneren Sprachform bei W.v.Humboldt

（Das Gefühl aber täuscht sich darüber nicht…－ W.v.Humboldt －）

Ryuji ENDO

フンボルトは遺稿となる『カーウィ語研究序説』の中で「内的な言語形式」について語っているが，明確な定義を与えなかったため，これまで議論が絶えなかった。この小論では，この難解な概念を解明し，解釈することを目的とする。その手がかりとして現代ドイツの言語哲学者ヴァイスゲルバーを取り上げる。彼はこれまでの先行研究を検討し，新しい解釈を加えて，いわゆるフンボルト・ルネサンスを推進したことにより，フンボルトの後継者として評価されているからである。ヴァイスゲルバーは「新ロマン派」として，カシーラ，ポルツィヒそして彼自身を挙げているが，小論でも彼らの研究を再構成して問題点を探ぐり，結論として，私自身の解釈を提出する。

カシーラはフンボルトの言語論に３つの原理の対立－主観と客観，エルゴンとエネルゲイア，素材と形式－とその再止揚を見る。それらを綜合し客観化する原理が「内的な言語形式」である。ポルツィヒはヴント，フッサール，マルティの学説と対決することを通して，自身の文化的な立場を確立し，「内的な言語形式」とは文化共同体の中における統一的な創造原理としている。ヴァイスゲルバーの主張は大戦をはさんで前期と後期に分かれ，前期では「対象としての世界の把握」と「言語共同体に対する個人の所属」を統合するものとして「内的な言語形式」を考え，後期では母語と共同体の相互作用として「世界の言語的な変換」を提示している。私自身は「内的な言語形式」を３つの契機－有機体，精神，内的な形式－について論じ，この概念がロマン主義的な本質を持つことを確認しつつ，カントとの関わりを跡づけて，それが一つの認識形式に他ならないことを示す。

In dieser Abhandlung geht es um eine Klärung und eine Interpretaion des Begriffs der "inneren Sprachform" von W.v. Humboldt. Zu diesem Zweck wird die Behauptung L. Weisgerbers zum Angriff genommen, da er als "Neuromantiker" und Nachfolger von Humboldt gilt. Weisgerber bezeichnet drei Theoretiker-Cassirer, Porzig und sich selbst-als bedeutend, weil diese sich positiv und gründlich mit dem Begriff Humboldts auseinandersetzen. Hier befasse ich mich mit ihren Sprachtheorien, um zum Schluss zu meiner eigenen Interpretation zu kommen. Für Cassirer bedeutet der Begriff der "inneren Sprachform" das Objektivierungsprinzip, unter dem der Gegensatz der drei Momente-Subjekt und Objekt, Ergon und Energeia, Stoff und Form-aufgehoben wird. Porzig versteht unter dem Begriff das einheitliche Schöpfungsprinzip innerhalb einer Kulturgemeinschaft. Bei Weisgerber synthetisiert in der früheren Phase der Begriff die Weltauffassung einerseits und die Zugehörigkeit eines Individuums zu der Sprachgemeinschaft andererseits zu einer Einheit. Später zeigt er aber die sprachliche Anverwandlung der Welt auf. Zuletzt wird der Begriff von mir selber durch Analyse der drei "romantischen" Kategorien-Organismus, Geist sowie innere Form-und in Bezug auf die kantische Erkenntnistheorie als sprachliche Erkenntnisform ausgelegt.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

1．はじめに

パース（Charles Sanders Peirce）は，1908 年のある書翰で記号について，こう述べている。「私は記号を次のように定義する。それは一方では対象によって規定され，他方では人の心に観念を規定する」[1]。言語は意味ないし概念とその対象を持つ限りにおいて記号の典型であるが，言語の機能とその本質をめぐっては古来から議論が絶えない。とりわけ言語において意味ないし概念とその対象はどう関わるのか，その文法は普遍的な原理に基づいているのか，あるいは相対的なものであるのか，言語は伝達の手段であるのか，あるいは文化の表現であるのか，と言った問題は常に言語について問われる問題であり，論者は自己の学問と責任とをかけて明確な態度決定を求められる。こうした難解な問題の一つに「内的な言語形式」（die innere Sprachform）がある。

この概念はフンボルト（Wilhelm von Humboldt 1767-1835）によってその最晩年になってはじめて主張されたものであるが，それはドイツ語文化圏を超えて，例えばサピア（Edward Sapir）やチョムスキー（Noam Chomsky）によって取り上げられている[2]。

フンボルトはよく知られているように，政治家としての公務のかたわら[3] 1780 年代からほぼ半世紀にわたって，文化と言語について現在においてもなお影響力のある著作を次々と発表した。彼の研究活動は一般に 3 期に分けられ，バスクの文化と言語について研究した第 1 期，アメリカ先住民の言語を学びその言語思想を深めた第 2 期，ジャワ島の文化と言語についてサンスクリットとの関係にまでさかのぼって体系的な思索を展開した第 3 期とされる[4]。「内的な言語形式」という概念が現われるのは，その最後の時期で，彼が中世ジャワの文語であるカーウィ語に関する大著の序論をまとめた『カーウィ語研究序説』（Einleitung zum Kawiwerk）においてである[5]。

この概念についての叙述は定義や説明を伴ったものではなく，きわめて難解である。具体的に見てゆくと，まず「内的な言語形式」という言葉が初めて見出されるのは『序説』の 20 節であり，そこでは「音声形式」に対立させて唐突に持ち出される。「言語は・・・内的な言語形式の洞察によって導かれ，これまで以上に多様で鋭く区切られたニュアンスを形成する」[6] とされる。更に同じ節で，同じく「音声形式」に対して用いられ，「音声は，必然的により多く同一性をもたらす内的な言語形式によるよりも，はるかに大きな多様性を許す」（7）と言われる。そのあとの 21 節は「内的な言語形式」という題であるにもかかわらず，この概念は登場しない。しかしそれは 22 節になって再び現われ，言語とは「外的な言語形式と内的な言語形式の綜合」[8] であると述べられている。前後関係からこのうち「外的な言語形式」が前にあった「音声形式」であることは判るが，「内的な言語形式」とは何であろうか。説明が全く不充分であり，フンボルトの研究者は必ずこの点を指摘している。例えばレオポルド（W.Leopold）は，フンボルトの記述には「実証的な学問の客観的な正確さが見られない」[9] と批判し，ヴァイスゲルバー（L.Weisgerber）は「内的な言語形式についてははっきり述べられていない」[10] とし，ギッパー（H.Gipper）は「定義が与えられず数多くの誤解や誤った解釈にさらされた」[11] と記している。

これは「内的な言語形式」という概念だけではなく，フンボルトの著作全体に当てはまる特徴であり，歴史的に見ればカントに対するヘルダー，ヘーゲルに対するニーチェのようにドイツ語散文の一つの伝統とも言いうる。ヘルダーもニーチェもフンボルトもいわゆる「幾何学的な秩序によって」（スピノザ）書かれている訳ではない。読者はこれらの思想家をどう理解するかという解釈の問題として読むことを強いられる。

この小論ではこの「内的な言語形式」という難解な概念について重要な先行研究を辿ると共にフンボルトの思想を再構成しつつ，独自の解釈を加えることを目的としている。

2．カシーラの検討

議論を進める手がかりとして，私はここでヴァイスゲルバー（Leo Weisgerber 1899-1985）という一人の言語学者に注目したい。彼は第二次大戦をはさんで一貫してフンボルトを研究し，その理論を発展させてフンボルトの後継者として評価されているからである[12]。ヴァイスゲルバーは何度か学術誌で「内的な言語形式」について論じている。そのうちの一つ『言語学における「新ロマン派」』[13] の中で彼はフンケ（Otto Funke）の論文を引いて，フンボルトを創始者とする流れとして「新ロマン派」を承認し，その現代の代表者としてカシーラ（Ernst Cassirer 1874-1945），ポルツィヒ（Walter Porzig 1895-1961）そして自分自身を挙げている。今や三人とも故人であるが，彼らは 20 世紀においてフンボルトの学説を発展させ，いわゆる「フンボルト・ルネサンス」をおこした人々であり，「内的な言語形式」を重要な問題としたことも共通している。こうした意味でこの小論に

おいてもこの三人の学説を検討すること通して，フンボルトの概念を究めてゆきたい。まずこの２節ではカシーラを取り上げ，３節ではポルツィヒ，４節ではヴァイスゲルバーの議論を辿り，５節では私自身の解釈を加える。

カシーラは『シンボル形式の哲学』(14) および『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学におけるカント的な要素』(15) でフンボルトを扱っている。『シンボル形式の哲学』では３つの原理的対立および根本契機としてフンボルト言語観が捉えられている (16)。カシーラによれば第１の対立は「主観性と客観性」であり，第２は「エルゴンとエネルゲイア」，第３は「素材と形式」である。カシーラの説明では原理的対立とその解決としての「根本契機」つまり方法論が区別されず対等に表記されているので，判かりにくい。例えば，第２の対立の契機として「発生論」が出てくるが，これは「エルゴンとエネルゲイア」の対立を発生論的に扱い，言語は「エルゴン」ではなく「エネルゲイア」であるとする議論である。

カシーラの理解によれば，言語はフンボルトにとって個人の運命ないし主観性と民族の客観性，人類の歴史ないし普遍性との分離であり，この分離の「再止揚」(Wiederaufhebung) である。その「再止揚」をもたらす契機としてカシーラは「媒介」と「形式」をあげる。「言語はつねに媒介者である。まず第１に無限な自然と有限な自然との，更に一個人と他の個人との媒介者である。同時にこの行為によって，言語は統合を可能にする」(16) からである。カシーラはこの文章を自分の言葉として記しているが，これは実はフンボルトの引用である。それは1812年に書かれた初期の論文「バスクの言語と民族」の中の一文にある。「無限な自然」とはいわゆる大自然であり，「有限な自然」とは人間のことである。言語は自然と人間との間，さまざまな個々人の間を仲立ちし，それらを合一させる働らきがある，と若いフンボルトは考えたのである。この考えは晩年には更に発展し，『序論』では媒介するものが「個人と全体性」(Ⅶ 25)，「音声と思考」(Ⅶ 53)，「自主性と感受性」(Ⅶ 55)，「個人と人類」(Ⅶ 56)，「自然と個性」(Ⅶ 59)，「音声と概念」(Ⅶ 101)，「主観性と客観性」(Ⅶ 115) といった二項対立となり，これらがことごとく言語によって結びつけられる。この限り，カシーラの指摘は当を得ていると言ってよい。ただカシーラは言語のこの働らきを「止揚」として，つまり弁証法的な機能として捉えているが，フンボルトの用いる「媒介」は「両者を有機的に結びつける」という内容を持ち，「直接的に存在するものも他のものによって条件づけられて存在するに至る」というヘーゲル的な弁証法の意味とは異なっていることには注意しなければなるまい。フンボルト自身が「止揚する」(aufheben) という言葉ではなく「結合する」(verbinden Ⅶ 55,115)「結び合わせる」(zusammenknüpfen Ⅶ 55)，「結びつける」(anknüpfen Ⅶ 56)，「関連づける」(zusammenhangen Ⅶ 59) などを用いていることもそれを裏づけている。その理由は，フンボルトの思考が弁証法的というよりも認識論的であるためと考えられる。

「媒介」と並んでカシーラが注目するのは，言語の形式的な側面である。カシーラによれば，言語は感覚的な印象に「形式」を与えるという意味で主観的である。しかしその与えられるものが「形式」であるが故に「言語は…経験的・心理学的な主観としての人間に対して客観的なものとして対峙する」(17)。なぜなら「形式」は「一般的な諸原則に根ざしている，より深くより包括的な，普遍的・規定的な…観念」(18) であり，「客観的なものについて，われわれのすべての表象に決定的な契機として組み込まれることになる精神のある理解様式を含んでいる」(19) からである。カシーラの言う理解様式とは「世界の見方そのもの」(20) であるから，言語の「主観性はそのまま再び客観的なものとなる」(21)。つまり言語にとって「形式」とは客観性を保証するものとカシーラは見ているのである。

カシーラの述べるフンボルトの第２の契機は「発生論的な」観点である。カシーラはフンボルトの言語観について「言語の本質は，抽象と分析によって言語から取り出される要素なのでは決してなく，分節された音声に思想の表現を可能にする，永遠に繰り返される精神の働らきに他ならない」(22) と述べ，「言語はエルゴンではなく，エネルゲイアである」というフンボルトの定式を引用している。これはハイデガーも引用している有名な箇所であり，かつフンボルトの思想を知るために重要であると考えられるので，ここにその一部を引き考察を加えたい。フンボルトは言語の現実について，こう書いている。「言語は…永続するものであり，又瞬間ごとに過ぎ去るものである…言語自身は作品（エルゴン）ではなく，活動（エネルゲイア）である。それ故その真の定義は発生的なものでしかありえない。即ち言語は，分節された音声に思想の表現を可能にする，永遠に繰り返される精神の働らきである」(23)。まず一見すると，言語が「永続するもの」であることと「過ぎ去るもの」であることとは矛盾するように思われるが，これは次の「エルゴン」と「エネルゲイア」という概念を解明することによって矛盾なく理解することができよう。「エネルゲイア」はアリストテレスの概念であり，『形而上学』では

「デュナミス」(dynamis) と相関的に用いられる。後者が「能力ないし可能態」であるのに対し，前者は「実現ないし現実態」を意味する。しかしここではその意味ではない。なぜならフンボルトはこの概念を「エルゴン」と相関的に用いているからである。それは彼が「エネルゲイア」と「デュナミス」という論理を用いる『形而上学』ではなく「エネルゲイア」と「エルゴン」を対概念とする『ニコマコス倫理学』を根拠としているためと考えられる。「活動それ自身が目的である場合もあれば，活動以外の何らかの成果が目的である場合もある」(24)。ここで言う「活動」が「エネルゲイア」,「成果」が「エルゴン」である。つまりアリストテレスは『形而上学』の「現実態」とは異なった実践的なカテゴリイとして「エネルゲイア」を「活動，生成，働らき」という意味で導入したのである。そしてこれこそ「エネルゲイア」が「エルゴン」(作品，成果，所産) と相関概念となる理由である。こうして先程の疑問が解ける。「活動」ないし「生成」は「瞬間ごとに過ぎ去るもの」であり，同時にその目的が残るという意味で「永続するもの」である。これが「エネルゲイア」の本質である。そして，こうした意味で用いられる「エネルゲイア」の概念は必ずしも『序説』が初めてではない。フンボルトが 18 才の時に書いた覚え書き『芸術の概念について』(25) にすでにこの思想の萌芽が見られるのは驚くべきことである。フンボルトはそこで，芸術の空間性と時間性に関し「芸術の影響は…作品かエネルギーかである」(26) と記している。彫刻や絵画のような空間的な芸術は実体的な作品として，音楽や演劇は時間的な経過としてわれわれに働らきかけるという指摘であるが，ここで用いられた「作品」と「エネルギー」という言葉は『序説』の「エルゴン」や「エネルゲイア」と同じ方向で使われていることは疑いを容れない。

『序説』では同じ思想を別の概念で言い表わしている箇所もある。フンボルトが言語一般について述べている所である。「人は言語を死んだ製品としてではなく，それ以上に生産として見なさなければならない」(27)。かつて芸術に関して「作品」と「エネルギー」として捉えられた関係は言語に関して「製品」と「生産」と表現され，更に「作品 (エルゴン)」と「活動 (エネルゲイア)」とされた。フンボルトの考える言語の本質は動的な「エネルゲイア」であり，「精神の働らき」である。従って方法論としては「発生論的な」ものとなる。カシーラによれば，これは時間的な経緯を解明することではなく，構造を派生的なものとして見る，という意味である。つまり事実としてよりも存在論として捉えられた概念である。カシーラの論述の最後にある「分節された音声に思想の表現を可能にする，永遠に繰り返される精神の働らき」という言葉がほとんどそのままフンボルトの引用であることは，カシーラ自身がフンボルトにどんなに深く影響されているかを示している。

カシーラの主張する第 3 の対立は言語における素材と形式である。カシーラの理解によれば，「形式」とは「個別的な規定の統合原理」である。彼はこう言っている。「フンボルトの形式概念は…言語の個別的な規定に対して述べられていたことを言語の全体へと拡張する」(28)。そしてその根拠としてフンボルトの次の言葉を挙げる。「言語の自己意識という新しい活動によって…個々の語が言語や発話においてあらゆる場合の全体性に関連づけられる」(29)。カシーラの言う「個別的なもの」とは詰るところ「個々の語」のことであり，これが素材である。その素材を一般的な全体性，即ち，客観性へ媒介するものが「言語の自己意識」であり「形式」である。この素材と形式とを統一するものが言語である。更にその「言語の自己意識」のことをカシーラは「表象能力の自発性の働らき」(30) と呼び，議論を更に先に進める。なぜなら「形式」は客観性を保証するだけでなく，表象能力として受容性に対する自発性を意味し，「素材に対する形式の優位」(31) を獲得するからである。そしてこれはフンボルトがカントとともに主張するものであるとカシーラは指摘し，それ故にフンボルトは「カントの思想圏に根ざしている」(32) と結論づける。このフンボルトとカントの関係を更に詳しく論じたものが『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学におけるカント的な要素』(33) である。

この論文は基本的に『表象形式の哲学』を受け継いでいるが，特にフンボルトとカントとの関係を主題としている点，「内的な言語形式」を扱っている点など，前者を更に発展させている。「カントの批判哲学には言語哲学が欠けているので，カントの体系とフンボルトの言語学の基礎づけとの間には，直接的な関係はないように思われる。…しかし，この潜在的な思想的な媒介を明らかにし，それによって影響に対する新たな証明を行なうことがこの考察の試みである」(34) とカシーラは自分の立場を明らかにしている。

カシーラの出発点はカントもフンボルトも「綜合」の思想である点にある (35)。これが両者の「いわば通底している道」(36) である，とカシーラは言っているが，フンボルトがカント哲学の引力圏にいる思想家であることは，カシーラの指摘通りであろう。これはカシーラだけではなく，現代のフンボルト研究者も同じ見解を述べて

いる。例えばヴォールファールトは『純粋理性批判』を引いて,カントの認識論がフンボルトの言語観に強く影響していると主張し[37],ヴェルケはカントの「構想力」(Einbildungskraft)がフンボルトにおいては芸術と言語に適用されていると述べている[38]。無論,研究者の中にはヘンゼルのように,フンボルトとシェリングとの関係を強調する人もいるが[39],フンボルトが若い頃から何回かカントを集中的に研究していた伝記的な事実ー詳しくは後に述べるーもあり,フンボルトがカントを継承していることは間違いない。

カシーラによると,フンボルトの「綜合」の思想は「和解」(Versöhnung)と「調和」(Übereinstimmung)として現れている。「和解」とは特殊と普遍,有限と無限,自由と必然といった形而上学的な対立を媒介によって和解させること[40]であり,「調和」とは世界と人間の調和であって,真理を認識する可能性であるとしている[41]。ともにカシーラはフンボルトを引用して論証しているが,こうした思想はカントの「判断力」(Urteilskraft)の機能に対応するものと見ている。カシーラはその機能を「客観化の過程」[42]であり,言語的には文章の中のコプラによって表わされるとしている。こうして彼は「語に対する文の優位」というフンボルトの原則をカントにおける「概念に対する判断の優位」に対応させる[43]。しかしながら「綜合」と「客観化」とは必ずしも同じことを意味しない。私自身はむしろ先にあげたヴェルケが指摘したように,カントの「構想力」の概念がフンボルトの言語哲学に適用されたと考える。カントの「構想力」とは「多様性をまとめあげる」能力だからである[44]。「綜合」については『純粋理性批判』においても中心的に論じられ,表象と対象,自我の世界と物の世界,主観性と客観性,自由と必然などの対立の「綜合」はカントにとって主要なテーマであって,フンボルトの「和解」と「調和」はこの延長線上で考えられるべきである。

カシーラは次に「内的な言語形式」を取扱っている。フンボルトのこの概念が実はカント哲学を基礎にしていることを論証している点で,この論文は重要である。この問題に関し,カシーラは「形式」の機能に注目して分析している。カシーラによれば,ここで使われている「形式」はきわめてカント的な認識論の概念であり,「素材」が感覚の受容性を意味するのに対し,思考の自発性を示すものである[45]。「形式」は「単なる関係の表現」であり,それ故「客観化の原理」である[46]。「形式」は主観に属するものであっても思考を通して対象を関係として客観的に規定し,客観的なものとして認識を可能にする。この「内的な言語形式」を具体的に表わすものとして,カシーラはフンボルトの次の言葉を挙げている。「言語の違いは音声や記号の違いではなく,世界の見方の違いそのものである」[47]。つまり「内的な言語形式」とはカシーラにとって「世界の見方」そのものである。「世界の見方」(Weltansicht)は観念的で原理的な「世界観」(Weltanschauung)とは異なり,言語による世界の捉え方といった意味であろう。カシーラの指摘は正鵠を得ていると私は考える。ただフンボルトの引用が『序説』からではなく,それより10年以上前の1820年7月に発表された『比較言語研究』[48]である点は多少とも問題を残す。1820年の論文にはまだ「内的な言語形式」という概念は登場せず,「思想と語の相互依存」ないし「内的な知覚と創造の方式」[49]という言い方に留まっているからである。こうした問題点はあっても,フンボルトとカントの関係を明らかにしたカシーラのこの論文が20世紀においてフンボルト研究を深めたものであったことは疑いを容れない。

3. ポルツィヒの検討

ポルツィヒはその論文『内的な言語形式という概念』[50]において文化史の立場から,この概念を新たに確立しようとしている。その基本的な課題について,彼はこう述べている。「ある時代,ある文化共同体のさまざまな『内的な形式』を相互に関連づけること,それらがどれ程統一的な原理を含むか究めること,つまりわれわれが『文化』と呼んでいるものがどれ程実際に理解しうる統一体であるかを究めることが重要である」[51]。「文化共同体」の中で統一的な原理としての「内的な形式」について考えるというポルツィヒの立場はカシーラとは異なる問題意識であり,「言語共同体」で「内的な言語形式」を問題としたフンボルトにより近いものと言える。その例としてポルツィヒは,ゲーテの「内的な形式」(die innere Form)と造形美術の様式(Stil)とをあげている[52]。ポルツィヒによれば,ゲーテの「内的な形式」とは「芸術家が作品に外的な形式を与える前に,どのようにその作品の内容を捉えていたかという…特別なやり方」[53]であり,芸術作品の様式とは「個性を超えて社会的および発生的な関連を作り出す」[54]ものである。

その問題を明らかにするために,ポルツィヒは概念史的な手法を用い,「内的な言語形式」に関するこれまでの学説を3つの分野に整理し,検討している。即ち,心理学的な学説としてヴント(Wilhelm Wundt)を,論理学的な方向としてフッサール(Edmund Husserl)を,言語学的な立場としてマルティ(Anton Marty)を取り上

げている。この 3 分野以外にポルツィヒは「実証主義」にも触れているが，これは「科学的に捉えられる客体として『言語』一般を否定」[55] しているとして，検討の埒外に置いている。

ポルツィヒに従えば，ヴントは「内的な形式」を「一定の外的な形式をその効果としてもたらすような…心理的な特性と関係の統計」[56] と捉えている。つまり，ヴントは言語の構造的な相互関係という観点から，これを問題とし，内的な形式の効果として外的な形式が成立すると見ている。こうした見解に対して，ポルツィヒ自身は「われわれが探し求めたものは，まさにあの客観的な事象の法則的な関連性であった」[57] と批判する。つまり，心理的に分析できるものは個人の精神に限られるが，言語は個人の意識領域を超えて存在するものを含み，従って，心理的なものは現象の統一的な根底をなすものではない，ということであり，これは言語に関する心理学的な学説一般に対して根本的な批判となっている。

フッサールの言語理論の核心は『論理学研究』第 2 巻の「純粋文法」の理念であり，ポルツィヒは次のようにまとめている。フッサールは表現（Ausdruck）と意味（Bedeutung）と対象（Gegenstand）とを区別し，それらに対応する理論として外的な言語形式，意味の純粋な形式としての純粋文法，具体的な対象関係をたてる。更に文法的な区別には意味の領域の区別も対応し，自立的な意味と非自立的な意味との区別がある。従って，「内的な言語形式」とは意味それ自体の観念的な関係となる。これに対しポルツィヒは，言語の観念的な固定化を批判し，このような言語観からは常に変化しつつある言葉を捉えることが出来ず，言語の発達はその根拠を失うと指摘している。たしかにフンボルトは言語をこのような観念的で固定的な体系としてではなく，むしろ相対的で民族的な現象として考えており，いわゆる普遍文法には否定的である。フンボルトはこう述べている。「言語はいわば諸民族の精神の外的な現われであり」[58]，「言語の構造が異なるのは…それが諸民族の精神の特性であるからである」[59]。

ポルツィヒの理解によれば，マルティは 3 つの言語形式を区別し，そこから「内的な言語形式」の 2 つの意味を導き出している。3 つの形式とは音韻や意味といった外面的に知覚できる表現手段としての「外的な形式」，内面的にのみ経験できる表現手段としての「内的な形式」および文法構造を示す「発生起源的な特性」である。そのうち「内的な形式」には 2 種類あり，「比喩的な形式」と「構成的な形式」とである。前者は比喩や転義で用いられ，語の意味に関連し，後者は各言語において異なった形で表現され，文の構成に関わる。ともに言語に内在する独自の法則性である。これに対し，ポルツィヒはその「内在する法則性」に疑問を呈する。即ち，マルティにおいては，表現される内容はそれぞれの状況において選択されることから，その内容は表現に先立って存在することになる。従って言語の本質は別に存在する自立的な内容である。とすれば，「内的な形式」が「内在する法則性」という概念に後退し，そもそも「内的な形式」は言語の本質としての意味を失ってしまう。

以上がマルティに対するポルツィヒの批判の要点であるが，言語の意味および構成という概念と内在する法則性という概念との間にある論理的な必然性はたしかに希薄である。この点フンボルトははるかに論理的でありかつ具体的である。彼は言語の形式についてこう述べているからである。「言語の形式とは…単にいわゆる文法形式ではない」[60]，そして「分節された音声を思想の表現にまで高める精神のこの働らきの中にある変らぬもの，同じ形のもの…が言語の形式である」[61]。

このようにヴント，フッサール，マルティの学説を批判的に検討したのち，ポルツィヒは結論として自分の立場を明らかにしている。彼は人間が一つの言語を話すという事実から出発する。「一つの言語を話すということは単にある習慣的な記号を使用するということでは決してなく，断えざる新しい創造である」[62] とポルツィヒは述べる。こうした創造が可能であり，それが他の人間に理解されるためには「その言語共同体の個人の中に形式を与える一定の原理が存在する」[63] はずである，というのがポルツィヒの立場である。その「内的な言語形式」の働らきは 2 つあり，言語現象に統一性を与えることと，精神の産物としての言語が芸術や宗教などの他の産物と関わりを持つことである [64]。こうして各個人にとって国語の「内的な形式」は，自分の顔のように直接には認識できないが，厳として実在する「統覚の先験的な形式」[65] である。従って一般的に「内的な言語形式」とは「外的な言語形式と相互に作用する言語共同体の独自な統覚形式」[66] となる。

ポルツィヒの立場はこうして認識論的なものであるが，「統覚の先験的な形式」を最終的な結論とするのは唐突な感をまぬがれない。これは言うまでもなくカントの概念であり，ポルツィヒのこれまでの議論にはカントとの関わりは正面きって現われなかったからである。しかし先に問題としたカシーラの仕事を考慮する時，「内的な言語形式」に関するポルツィヒの解釈はカシーラとは異なり第一批判を根拠に，個人における認識の形式を

言語共同体に適用したものであるが,ともにフンボルトがカントの思想を言語にまで拡げたと考える点で軌を一にしていることは興味深い。

4．ヴァイスゲルバーの検討

ヴァイスゲルバーは大戦をはさんで2つの重要な論文を発表している。1つは1926年の『内的な言語形式とドイツ語に対するその意味』(67)であり,もう1つは1954年の『世界の言語的な変換様式としての内的な言語形式』(68)である。1926年の論文は2つの部分から成り立っており，前半は記号論的な立場から言語の「内的な形式」を分析し,後半部分では印欧比較言語学をふまえつつ，その分析の成果をドイツ語に適用している。その「内的な形式」の分析に「客観性」を保障するため，ヴァイスゲルバーは記憶喪失（Amnesie）という精神病理学の結果から出発する。色彩に対する言語の喪失に関する研究を例に引きながら,彼は色彩語の喪失が実は色彩の名称ならびに色彩の秩序原理の破壊であると結論する(69)。このことから彼は名前の所有と概念の所有とが密接な相関関係にあると考え(70)，更に，およそ現象を概念化するもの,つまり秩序原理を可能にするものが言語であることを主張する。なぜなら,感覚の複合体は「言語記号の助けを借りて」(71) 意識内容として定着し，この名前によって感覚から独立して任意に再生される全体像,即ち概念が成立し,「世界の知的な支配を獲得する」(72) からである。こうした精密な記号論的な分析は，ソシュールの『一般言語学講義』の出版が1916年であることを考えると,ソシュールとほぼ同時期に理論化されたことになり,少なからぬ警きを禁じえない。ソシュールの「能記」(signifiant）と「所記」(signifié）という対概念も「名前」と「概念」として登場している。それらが独自なものであることの証左として,それらが一貫してヴァイスゲルバーの学説に現われ,後には各々「音韻形式」ならびに「内容」として発展してゆく(73) ことがあげられる。

こうしてヴァイスゲルバーによれば,多様な現象を概念化し，その概念によって「世界の知的な支配」を可能にするものは言語であるが,彼はこの自分の学説を次のようなフンボルトの命題によって根拠づけている。「言語は…精神がその力の内的な作用によって自分と諸対象の間に置かざるをえない一つの真実な世界である」(74)。ヴァイスゲルバーによれば,「言語はその言語共同体の各構成員に音韻的な象徴である名前だけでなく…概念をも伝える」(75) のであり,「各個人は…言語的な祖先たちによる経験に束縛されている」(76) ため，人間は言語を通して対象としての世界を捉えるとともに,その同じ言語を通して共同体と結びつく。そして言語のこの2つの作用，即ち「対象としての世界の把握」と「言語共同体に対する個人の所属」とを統合するものとして，ヴァイスゲルバーは「内的な言語形式」を考える。「言語は名前と概念，つまり語のみならず，われわれがその語を思考の流れの中で整理する形式をもわれわれに与える」(77) と彼は述べ，これこそ「その言語の中で考えられ語られるすべてを評価する鍵であり」(78),「内的な言語形式」であるとする。具体的には「概念的な構成」および「構文的な形成可能性」である。(79)「内的な言語形式」を「概念」および「構文」として理解することは，先行研究のカント的な解釈と比べるとはるかに判り易いが,「語を思考の流れの中で整理する形式」とは言語の統一原理でなければならないから,これを二つの領域に分解してしまうことは論理的な矛盾であろう。

この点を意識してか,1954年の論文『世界の言語的な変換様式としての内的な言語形式』では，言語の統一原理について考察が深められている。論文はフンボルトによる「内的な言語形式」の定義およびその説明から出発する。「外的な言語形式」が「音声形式」であることは随所に明らかであるが(80),「内的な形式」について明確な定義のなされていないことが問題を複雑にしている，とヴァイスゲルバーは以前と同じように考えている。しかし以前と異なるのは「内的な言語形式」を「概念」と「構文」とに分けずに「内奥の法則」(81) として統一的に捉えていることである。その解決の糸口を見つけるため，彼は改めて『序説』の「諸言語の形式」の章（Ⅶ43）から「内的な形式」を暗示する文章を引用し，まとめている。彼が特に強調しているのは次の点である(82)。1）分節された音声で思想を表現する精神の作用であること，2）その作用に内在する不変で同形のものが言語の形式を決定すること，3）形式という概念は文法形式にとどまらず語彙の形成にまで及ぶこと，4）言語形式を見出すためには音声のみならず概念を形成する感覚的な印象と自立的な精神とが問題となること，である。ここで注目すべきは，ヴァイスゲルバーが「内奥の法則」を精神の作用，形式の決定，語彙の形成，概念の形成など動的に捉えていることであろう。以前の論文で引用されたフンボルトの言葉が「言語とは精神と諸対象との間の真なる世界」および「世界の見方」と静的であったのに対し，戦後の論文の手がかりは「世界を思想に変える行為」(83) であることもそれを裏づけている。この動的な行為のことをヴァイスゲルバーは「存在の精神的な変

換」[84],「世界の言語的な変換」[85],「世界の語化という過程」[86],「世界の解明の形式」[87] と呼んでいる。こうした観点の変化をヴァイスゲルバーは 1800 年頃の「世界の見方」から 1830 年代の「内的な言語形式」というフンボルトの立場の変化に求めている。前にも述べたように,「内的な言語形式」という概念は『序説』において初めて現われるからである。

動的な観点とならんで,この論文に著しい第 2 の特徴としては, 言語の三層構造という考え方である。即ち, ヴァイスゲルバーは言語を「普遍的人類的な」層,「共同体と結びついた」層,「個人的な」層といった三重構造として捉えている [88]。更にこれらの三つの層に対応する様式として「人間の言語能力」,「この言語能力の共同体・歴史における顕現」,「個人的な言語力」を挙げ[89], これらが現実の言語現象であるとしている。しかしこの言語の三重構造はすでにフンボルトが「その都度話されるもの」,「その成果の全体」,「言語能力」として指摘したものであり [90], 内容的には言うまでもなくソシュールの言語の三側面として早に有名であるが,フンボルトとヴァイスゲルバーが各々民族と母語の共同体を強調している点は注目に値する。彼らの発想が民族語から出発しているからであり, フランス系スイス人であるソシュールが民族共同体をテーマとしないことと対照的だからである。

こうしてヴァイスゲルバーにとっては,「内的な言語形式」は「母語の内的な形式」として「母語と言語共同体の相互作用」[91] によって成立し, その「言語共同体による世界の言語的な変換の様式」[92] である。従ってそれは「人類の言語能力の創造的な力が言語共同体によって絶えずなしとげられる『世界を思想に変える行為』の中で歴史的に現実となった」[93] ものである。

このヴァイスゲルバーの結論は長い年月をかけた思索に裏づけられており,最も深くフンボルトを理解するものと評価されている。しかしながら, いくつか疑問も残る。例えば「世界の言語的な変換の様式」は果たして動的に捉えるべきものであろうか。ましてこれを「世界の語化の過程」と呼べるであろうか。「語化」(Worten) はヴァイスゲルバーの新造語であり,「言語化」の謂いであろうが,フンボルトはそれほど新奇なことを述べたのであろうか。ヴァイスゲルバーの主張した静的な「世界の見方」と動的な「内的な言語形式」とは共に『序説』に見られる。これらは同じ意味ではなかろうか。更に言語の三層構造において「内的な言語形式」は第 2 の言語共同体のみに関わっているが,第一と第三の層においては何の機能も果さないのであろうか。これらはヴァイスゲルバーに先立つすぐれた研究者たちが指摘したカントとの関係について,何の言及もないことと並んで根本的な疑問である。とは言え, 言語共同体に関する確かな知識に支えられた議論には強い説得力があり,フンボルトの思想を一少なくとも一部は一適格に言い当てていると考えられる。今後ともおよそ「内的な言語形式」を問題とする者は,必ず考慮に入れなければならない学説である。

5. 結論

この節では,「内的な言語形式」に関する私自身の見解を述べ, 今後の問題点をまとめたい。私もまず, これまでの先行研究者たちと同様,フンボルトがこの概念をどう捉えていたかを再構成することから論を始めたい。手がかりとして「内的な言語形式」という概念の持ついくつかの契機について考察をすすめる。その際,「内的な言語形式」はロマン主義の思想であるとの作業仮説をたてる。これまで見たように, ドイツの研究者たちはほとんどこの点について取り立てて論ずることはなかったが,ロマン主義はフンボルトを理解するためにきわめて重要であると私は考えている。なぜなら彼の生きた 18 世紀の後半から 19 世紀前半は古典主義からロマン主義への過渡期に当たり,新しい時代精神としてのロマン主義はこの時代のあらゆる思想家に深い影響を与えたからである。当時のドイツにとってはフランス革命とそれに続くナポレオン戦争,特にその戦後処理が最大の政治的な課題であり, その文化的な現われがドイツ・ロマン主義であったと言ってよい。そうしたロマン主義は政治と文化,フランスとドイツなど対立的な契機から成立したため, 昼と夜, 内と外といった二つの世界を内包する二元論を発達させた。このロマン主義の展開と並んで更に科学の発展もこの時代の特徴であった。特に生物学の成果には目を見張るものがあり, リンネ (Carl Linnaenus 1707-78) の分類学, ビュッフォン (Comte de Buffon 1707-88) の「博物誌」, ラマルク (de Lamarck 1744-1829) の「進化論」, キュヴィエ (Georges Cuvier 1769-1832) の「比較解剖学」などはロマン主義の精神科学に強い衝撃を与えた。とりわけ生命体の持つ統一性や個々の部分を統括する全体性,単純で下等な組織から複雑で高等なものへ発達するという進化論など生物学的な見方は人文科学に深い痕跡を残した。

こうした時代的な背景を考慮しつつ,「有機体」,「精神」,「内的な形式」などの概念を検討する。その中で「内的な言語形式」はロマン主義であるという作業仮説が確

かめられるはずである。

すでにカシーラによる「媒介」の概念について述べた折に，部分的には触れたが，フンボルトは，一貫して言語を統一体として捉えてきた。フンボルトにとって言語とは悟性的なもの，概念的なものにとどまらず[94]，「光と暖かさを持った…輝やく明るさ」[95]が不可欠である。なぜなら，言語は「生ける統一体であり，その息吹き」[96]であり，「内的に関連している有機体」[97]，「精神の力と直接的な関連を持つ，完全に完成された有機体」[98]であるからである。だからこそ言語は，「主観と客観」[99]，「感覚と精神」[100]，「個人と人類」[101]など結びつけることができたのである。異質なもの，対立的なものを吸収して，自己の一部とする有機体という考えは，明らかに生物学的なものであり，フンボルトはその成果を言語に援用している。しかし同時に又その有機体が「暖かさ」や「明るさ」を伴った「息吹き」と言ったきわめて主観的で非合理的な本質を持っていることは重要である。これは言語を内的な生命原理と見なすことと等しく，言語を客観的で普遍的な道具であると見るフランスの一般文法とは対蹠的な見方である。それ故にこそフンボルトは言語を「音楽や芸術」と同一視し[102]，想像力と感情を育くむもの[103]とするのである。この限りにおいて，フンボルトにシェリングと同じロマン主義的な要素を見出す研究者のいること[104]も当然であろう。

しかしここで，言語が有機体である根拠として「精神」が挙げられていることは注目に値する。「精神」とはさまざまな意味合いを持った概念であるが，他の場合同様，フンボルトが明らかな定義を与えている訳ではない。しかし，彼が「感性，悟性，精神」と並べたり[105]，「詩や哲学」と同一視したり[106]することを考慮すると，先に述べたカシーラやヴェルケと同じくカント的な意味での「構想力」と同じものと考えざるをえない。ちなみにカントの「構想力」とは「直観の多様性をまとめる」「生産的な認識能力」であり[107]，従ってそれは感性的でありながらさまざまな要素を統合するフンボルトの「精神」と一致する。こうして「精神」は言語の本質的な契機として「自発性と受容性」[108]とを結び，「言語的な諸要素」[109]を統一する。「言語的な諸要素」とは二重の意味を持ち，第一は「音声と概念」[110]であり，第二には「語幹と語尾」[111]である。それらは各々言語学で「分節」（Artikulation）と「屈折」（Flexion）と呼ばれるものである。

フンボルトにとって「分節」とは「精神的な統一」[112]であり，「語の統一性」[113]である。具体的には「概念と音声」[114]，「音声形式と理念形式」[115]の統一に他ならない。これは又「外的な言語形式と内的な言語形式の綜合」[116]とも言われる。現代の言語学において通常「分節」とは，記号素への第一次分節および音素への第二次分節のように全体から部分へ分析されるという道すじを辿る[117]のに反し，フンボルトは部分から全体へと統合される方向を考えていることは興味深い。その理由は，彼が「概念は分節の感覚に先行する」[118]とし，「意味付与」[119]が分節の本質であると考えていることによる。即ち，カント的な意味で事実問題よりも権利問題が本質的な問題であり，実在論より認識論がフンボルトの基本的な主題だからである。

更にフンボルトは，精神による言語的な要素の綜合として「屈折」を重要視している。「屈折」とは「接尾辞と語根とが融合して生まれる統一性と相互依存性」[120]のことである。フンボルトはこれを「言語構造の純粋な原理」[121]あるいは精神の「自発的な定立の活動」[122]と呼んで，「精神力」[123]の現われと見ている。彼によれば，この屈折は「二重性」[124]を持ち，「概念の指示とその概念が置かれる範疇の暗示」[125]という精神の活動である。「概念の指示」とは語の意味論的な語幹部分，「概念の範疇の暗示」とは語の文法的な接辞部分を指すと考えられるが，これを分析とせず精神による「二重性」の綜合とするのは，「分節」の場合と同じく，フンボルトの思想の特徴と言える。更にフンボルトはこの屈折構造を「正しい文法形式」[126]「天才的な原理」[127]と呼んで，言語の最も完成された段階としている。その結果，屈折言語であるサンスクリット，ギリシャ語，ラテン語，ドイツ語などが称賛され，それらの言語を育んだ民族が賛美される。しかし同時に同じ屈折言語であるアラビア語は，語を形成する３子音という枠組みが硬直している[128]ことや概念の分離が不十分[129]である等の理由で印欧語より劣った言語，劣った精神として位置づけられている。言語の問題を越えて，アラブ人の支配は好ましくない[130]とさえ主張される。更に『序説』の最後の３章では「それほど完全とは言えない言語」としてヘブライ語，デラウェア・インディアン語，中国語，ビルマ語などが印欧語の立場から批判の対象となっている。フンボルトのこの批判の根拠には一つの前提がある。それは言語が単純なものから複雑なものへ，偶然的なものから必然的なものへ，特殊なものから一般的なものへ，低級なものから高級なものへ，即ち，単音節の孤立語から膠着語を経て多音節の屈折語へ「進化する」という信念である[131]。こうしたフンボルトの見解は今日では受け入れられないものがほとんどである。第一に，世界の言語が孤立語や屈折語に分類されることは事実ではあるが，それ

は価値観を伴ったものではない。更にそれらの言語が「進化の体系」[132]に基づいて成立したものであるとの生物学的な認識は,フンボルトの生きた時代を反映したものであっても,現代の言語学の立場から見ると,明らかな誤りである[133]。

しかしながら,この誤りの原因を探ることは更に重要なことであろう。私の見るところ,それはフンボルトが「精神」をどう捉えたかによる。彼はこう述べている「言語はいわば民族の精神の外的な現われであり,民族の言語はその精神であり,民族の精神はその言語であって,両者をどんなに同一のものと考えても十分すぎることはない」[134],「われわれは国民の精神的な力を言語の相異性の現実的な説明原理として,真なる規定根拠として見なさなければならない」[135],「言語の構造が…異なっているのは,それが諸国民の精神的な特性そのものだからである」[136]。即ち,フンボルトによれば,言語とは民族精神そのものであり,言語の違いは民族精神の違いに起因することになる。ここに,言語を媒介として精神は民族と結びつく。民族精神とはとりもなおさずドイツ・ロマン主義のスローガンであり,アジアの諸民族やアメリカの先住民に対する劣等視は過去も現在もヨーロッパに一般的な傾向である。フンボルトの言語哲学にはこのような時代的,地域的な限界があったことは,ドイツでも日本でも余り論じられることはないが,それを認識するのは重要なことであろう。ただ少々フンボルトを弁護すれば,彼は屈折語がラテン語からロマンス諸語へ,古英語から近代英語へと発展しつつ「退化」してきたことを認め,中国語を批判した後で「言語の個々の長所は又とりわけ個々の知的な側面を形成することが出来るし,諸国民の精神的な資質は…多様であって,ある尺度で測ることはできないという反論」[137]をみずからしていることを指摘しておきたい。ドイツ人研究者には不可解な矛盾とみえるこの感性こそフンボルトが自分の時代や国家を超え,現代の世界に対して発言しうる資格の核心であると,私自身は考えている。

最後に「内的な言語形式」について私自身の見解を述べる。すでに「新ロマン派」の学説を中心に,この概念を一部だが解明した。私も「分節」との関わりで,言語が「外的な形式」と「内的な形式」の綜合であると突きとめ,「外的な形式」とは音声を意味し,「内的な形式」とは概念,思考などを表わすことを明らかにした。それらを受けて,ここでは更に「内的な言語形式」をより深く検討したい。

論を進めるに当たり,フンボルトが「内的な言語形式」をどう言い換えているかをもう一度見よう。『序説』の中に現われる語句として,「内的な理念」[138],「言語の知的な部分」[139],「内的な言語感覚」[140]などが挙げられる。「内的な理念」とは「音声という障碍」を克服し「言語完成」に努力する「理念」[141]であり,「言語の知的な部分」とは「精神の自己活動にのみ基づき…あらゆる人間の中にある目的と手段の同一性」[142]である。「内的な言語感覚」とは「言語を内部から支配し,至る所で主要な推進力を与える原理」[143]とされる。又「音声形式」と並んで「音声形式の使用」[144]として,即ち思考法則として言語の第 2 の原理とも言われている。こうした文脈でこれまで研究者はさまざまな解答を提示してきた。例えば,フンケ(O.Funke)は意味を動的もの,静的なもの,規範的なものに分析した結果,「内的な言語形式」とは「発話行為によって形づくられる思想の世界」[145]とし,イエルムスレウ(L.Hjelmslev)は「意義と形態との混同および語の理論と文法要素の理論との混同を内含している」[146]としながらも「内的な形式」は「一言語の体系であり,言語の精神」であって,「言語記号はすべて心的なものであるが,(内的な形式は)概念が言語学的な秩序のものではないことを示している」[147]と指摘している。シュトルテ(E.Stolte)はフンボルトによる「意味の三角形」に注目し,「音声形式」が「概念」を形成し,これが「対象」を指示するという構図から,「内的な言語形式」とは「外的な形式の精神的な内実」[148]であると述べ,この「精神的な内実」が最も深く最も全体的な認識を含むとしている。それとは異なり「内的な言語形式」の「形式」を手がかりにしたのはギッパー(H.Gipper)である。彼はフンボルトにおける「形式」がいわゆる forma formans 即ち「形成力の原理」[149]であり,「内的な言語形式」とは「あらゆる言語的なものを貫ぬく形成力」であり,「言語の精神的・内容的な側面」[150]であると考えた。こうして主なものだけでも解答は一様ではないが,結局は各研究者が何を根拠に,何を言語の本質と見るかという点に尽きると言えよう。

すでに繰り返し述べてきたように,明確な定義の形ではないが,フンボルトはかなりはっきりと言語の本質について語っているように,私には思われる。それによれば,言語は「二つの原理」[151]の有機的な綜合である。それらは「外的な形式と内的な形式」[152]であり,「音声形式と理念形式」[153],「音声と思考」[154],「感覚的な直観と知性的な概念」[155]である。これらの記述から明らかなことは,フンボルトが言語を二つの形式の綜合と考え,その二つの形式は外的な音声と内的な思考ないし理念であることである。特に「直観と概念」という術語の用い方および論理の方向からは,それらの「形式」が明

らかにある一つの認識論を前提としていることが伺われる。それは認識が感覚的な直観形式と論理的な悟性形式から成り立つとするカントの認識論である。こうして見ると，フンボルトは言語を一つの認識形式と考えていたことが判る。彼がしばしば，言語は意思疎通の道具以上のものと述べた[156]真意もここにあったと思われる[157]。

更にこうしたことから，フンボルトが「外的な形式」と「内的な形式」という術語にこだわった理由も推測できる。カントにおいて「形式」とは，「経験的な認識の合目的性」[158]であり，自由の原理なのである。即ち，素材（Materie）が感覚的で受動的な受容性であるのに対し，「形式」は論理的で自発的な法則なのである。シュプランガー（E.Spranger）の研究によると[159]，フンボルトは生涯カントを研究し続けたが，特に1788年から1789年にかけて，そして1791年の夏と1793年の秋には集中的にカントを読んでいる。「現在又とりわけ形而上学に関わっています。私自身の確信を新しく真摯に書き換えようと考え，最初から新たにカントの体系を徹底的に研究しています」[160]というフンボルトの書翰は，フンボルトに対するカント哲学の影響を余す所なく伝えている。こうした事実からもフンボルトの「形式」という概念がカント的なものであることは確実である。

その「形式」をフンボルトが外的なものと内的なものに分けるのは，カント的と言うよりもロマン主義的であろう。なぜならば，ロマン主義の言語論では「外的な言語」と「内的な言語」とを区別するのが普通だったからである。例えば，フィーゼル（E.Fiesel）によれば，ノヴァーリス（Novalis）やシュレーゲル（Fr.Schlegel）には「外的な言語と内的な言語という常に繰り返される二項対立」（161）があり，「外的な言語と内的な言語との間にある対立」[162]は「現象と本質」，「客観性と主観性」とを意味する。フィーゼルは象徴的にノヴァーリスの「内的な力の王国の外的な啓示」[163]という言葉をあげているが，これは当を得ていよう。

これまでの諸研究，とりわけカントやロマン主義とフンボルトの関係を考慮すると，「内的な言語形式」とは認識形式のことであり，「内的な形式」とは，ロマン主義的な概念である，と私は考える。フンボルトは言語が一つの認識形式であると主張した，というのが私の結論である。

ただしここで注意しなければならないのは，フンボルトもヴァイスゲルバーもこの認識が民族的なものとしていることである。確かに言語はまず民族的なものであるが，ソシュールを挙げるまでもなく，フンボルトが認める言語の3層構造からも，それは又すぐれて個人的なものでもある。言語と言語共同体との関係は終生フンボルトの課題であったが，それと並んで「文体を良くすることは思想を良くすることである」[164]とするニーチェ的な意味での文体論の再評価，即ち文体と個人的な思考との関係論も又きわめて重要である。更に人類的な規模での形態論（Morphologie）も認識論との関わりで―印欧語が規準ではなく―再評価されねばなるまい。19世紀的な形態論と異なり，現代の類型学（Typologie）は諸言語の普遍的な特質に関心を持っているようであるが，フンボルトの論じた屈折語，膠着語，孤立語，抱合語（現代では複綜合語と呼ばれることが多い）の異なる言語構造が持つ認識論的な意味は未だに解明が進んでいない。「mein Buch，私の本，buku saya，kitabu-ch-angu[165]」という言語構造による表現の違いにおいては，認識論的に見て，何が一体異なるのであろうか。本当にチョムスキーの主張するように「表層構造」だけが異なるのであろうか。それに答えることは，人類的な相互理解に資することになると思われる。その際，言語は認識形式の一つであるというフンボルトの学説は，研究の確かな手がかりとなるであろう。

[注]

(1) Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Correspondence, the Belknap Press of Harvard University Press 1979, p. 232, I define a Sign as anything which on the one hand is so determined by an object and on the other hand so determines an idea in a person's mind[…].

(2) E. Sapir, Language, Harcourt, Brace and Company, 1921, Ⅵを参照。
N. Chomsky, Cartesian Linguistics, Harper & Row, 1966, [36]-[51]を参照。

(3) フンボルトはプロイセンの貴族であり，1820年に53才で引退するまで常に政治的な仕事にたずさわった。ここでは詳しい伝記的な事実を記すことを控えるが，彼がウィーン会議のプロイセン代表団の一員であったこと，ベルリン大学の創設者であったことを挙げておく。
著作としては1785年の『芸術の概念について』（Uber den Begriff der Kunst）や1795年の『男性形と女性形について』（Über die männliche und weibliche Form）に始まり，1835年の死の直前まで書き続けた『カーウィ語研究序説』（Einleitung zum Kawiwerk）に至る。全集はWilhelm von Humboldts

Gesammelte Schriften, Berlin 1918 があり，その復刻版がWalter de Gruyter & Co. Berlin 1968である。以下引用はすべてこの全集による。例えば，全集 7 巻 230 頁はⅦ 230 と記す。

(4) Rudolf Haym, Wilhelm von Humbolt, Berlin 1856 にこの指摘がある。

(5) Ⅶ 1-344, 以下『序説』と略記する。1830年から35年にかけて書かれた著作の題名は『人類の言語の多様性と人類の精神的な発展に対するその影響について』（Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluβ auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts）であるが，追悼文を兼ねて後書きを記した弟のアレキサンダー（Alexander von Humboldt）によれば，この作品はヴィルヘルムが死に至るまで取り組んでいたカーウィ語に関する膨大な研究のうち，その言語哲学的な原論部分に（これだけが「印刷できるまで手を入れられていた（Ⅶ 345）」）を独立させて発表したものである。その題名は編集者がのちにこの著作に 11 節（Ⅶ 44）から採ったものであり，フンボルト自身によるものではない。この『序説』には亀山健吉教授による訳があり（『言語と精神』法政大学出版局1984），これは注をも含めて英訳や仏訳と比べても高い水準にある力作である。以下フンボルトの日本語訳はすべて筆者によるが，時に『言語と精神』を参考にさせていただいたことをここではっきりさせておきたい。因に「カーウィ」の発音について一言する。ドイツ語の表記は Kawi であり，普通 [ká:vi]と発音されるが，フンボルトは 1836 年版の『序説』に「サンスクリット，ジャワ語，マレー語，ビルマ語等のローマ字表記法」を提示しており（『言語と精神』にも掲載されている），w は v と区別してはっきりジャワ語におけるサンスクリット系の半母音を示している。従って Kawi は現代インドネシア語の bahasa kawi と同様[w]と発音されるべきである。これはフンボルトにとって瑣細なことではない。なぜなら彼自身が原語の音を尊重して，メキシコやメヒコではなくメシコであり（Ⅶ 144），モヒカンではなくムーヒカネーウである（Ⅶ 152）と，わざわざ注をつけているからである。

(6) Ⅶ 81,（dass）Sprachen durch die[…] Einsicht der innern Sprachform geleitet werden, mannigfaltigere und schärfer abgegränzte Nüancen zu bilden.

(7) Ⅶ 82,（da…）der Laut auch eine weit größere Mannigfaltigkeit der Unterschiede erlaubt, als bei der inneren Sprachform, die notwendig mehr Gleichheit mit sich führt.

(8) Ⅶ96, Synthesis der äuβeren und inneren Sprachform.

(9) W. Leopold, Inner Form, in: LANGUAGE 1929, p. 255, In Humboldt's writings one never finds the objective exactness of positivistic science.

(10) L. Weisgerber, Innere Sprachform als Stil sprachlicher Anverwandlung der Welt, in: STUDIUM GENERALE 1954, S. 575,（Humboldt）spricht[…]（in seinem Text）nicht ausdrücklich von innerer Sprachform.

(11) H. Gipper, Wilhelm von Hunboldt als Begründer moderner Sprachforschung, in: WIRKENDES WORT 1965, S. 15, Auch der Begriff der inneren Sprachform […]ist[…] mangels beigefügter Definition zahlreichen Miβverständnissen und Miβdeutungen ausgesetzt gewesen.

(12) レオ・ヴァイスゲルバー（福本喜之助訳）『言語と精神形成』講談社　1969，181 頁 -182 頁を参照。

(13) Leo Weisgerber, 'Neuromantik'in der Sprachwissenschaft, in:GERMANISCH-ROMANISCHE MONATSSCHRIFT 1930, S. 241-S. 259.

(14) Ernst Cassirer, Philosophie der symbolischen Formen, Darmstadt 1953（初稿は 1910 年である）

(15) E. Cassirer, Die Kantischen Elemente in Wilhelm von Humboldts Sprachphilosophie, in: Festschrift für Paul Hensel-Erlangen, Ohag-Greiz 1923.

(16) E. Cassirer, Philosophie der symbolischen Formen, S.100, So ist die Sprache überall Vermittlerin, erst zwischen der unendlichen und endlichen Natur, dann zwischen einem und dem anderen Individuum-zugleich und durch denselben Akt macht sie die Vereinigung möglich.

(17) E. Cassirer, ebenda S. 104,（dass）die Sprache[…] dem Menschen, als empirisch-psychologischen Subjekt, als objektiv gegenübertritt.

(18) E. Cassirer, ebenda S. 103f,（der）tiefere（n）und umfassendere（n）, universell-idealistische（n）Auffassung[…], die in den allgemeinen Prinzipien[…] gegründet ist.

(19) E. Cassirer, ebenda S. 102,（sie）birgt in sich eine geistige Auffassungweise, die als entscheidendes Moment in all unsere Vorstellung des Objektiven eingeht.

(20) E. Cassirer, ebenda S. 103, Weltansichten selbst.

(21) E. Cassirer, ebenda S. 104, die Subjektivität[…] wird aber wieder in sich zu etwas Objektivem.

(22) E. Cassirer, ebenda S. 104, das Wesen der Sprache beruht niemals auf diesen Elementen, die die Abstraktion und Analyse an ihn herausstellen, sondern ausschließlich auf der sich ewig wiederholenden Arbeit des Geistes, den artikulierten Laut zum Ausdruck des Gedankens fähig zu machen.

(23) Ⅶ 45 ff, Die Sprache[…]ist etwas beständig und in jedem Augenblicke Vorübergehendes.[…] Sie selbst ist kein Werk（Ergon）, sondern eine Tätigkeit（Energeia）. Ihre wahre Definition kann daher nur eine genetische seyn. Sie ist nemlich die sich ewig wiederholende Arbeit des Geistes, den articulirten Laut zum Ausdruck des Gedankens fähig zu machen. なおハイデガーの言及があるのは "Der Weg zur Sprache"（1959）の最初である。この論文が納められている "Unterwegs zur Sprache" Pfullingen 1975 では 247 頁にある。

(24) 『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 1 章1094a。翻訳は岩波文庫 15 頁より。

(25) Ⅶ 355f, Über den Begriff der Kunst（1785）

(26) Ⅶ 359, Die Wirkung der Kunst ist[…] entweder ein Werk, oder eine Energie.

(27) Ⅶ 44, Man muss die Sprache nicht sowohl wie ein todtes Erzeugtes, sondern weit mehr wie eine Erzeugung ansehen.

(28) E. Cassirer, ebenda S. 106, Humboldts Formbegriff dehnt das, was[…] für eine einzelne sprachliche Bestimmung ausgesprochen war, über das Ganze der Sprache aus.

(29) Ⅶ 109, ein neuer Act des sprachlichen Selbstbewusstseyns, durch welchen[…] das individuelle Wort, auf die Gesamtheit der möglichen Fälle in der Sprache oder Rede bezogen wird.

(30) E. Cassirer, ebenda S. 106, Aktus der Spontaneität der Vorstellungskraft.

(31) E. Cassirer, ebenda S. 107, Die Priorität der Form vor dem Stoff.

(32) E.Cassirer,ebenda S.106,（Humboldts Gesamtansicht）wurzelt im Kantischen Gedankenkreise.

(33) E. Cassirer, Die Kantischen Elemente in Wilhelm von Humboldts Sprachphilosophie, in: Festschrift für Paul Hensel-Erlangen, Ohag-Greiz 1923.

(34) E. Cassirer, ebenda S. 109ff, Der Mangel einer eignen Sprachphilosophie im kritischen System schien eine direkte Beziehung zwischen diesem System und Humboldts Grundlegung der Sprachphilosophie auszuschließen[…] Die folgenden Betrachtungen versuchen diese latenten und gedanklichen Vermittlungen sichtbar zu machen und damit einen neuen Beweis fur die Wirkung zu erbringen.

(35) E. Cassirer, ebenda S. 118, Auch für ihn（=Humboldt）wie für Kant wird der Begriff der Synthesis zum eigentlichen Haupt-und Leitbegriff.

(36) E. Cassirer, ebenda S. 110, die gleichsam unterirdischen Bahnen.

(37) Günter Wohlfahrt, Denken der Sprache, Freiburg / München 1984, S. 183.

(38) Klaus Welke, Zur philosophischen und sprachtheoretischen Begründung der Einheit von Sprache und Denken bei Wilhelm von Humboldt, in: Sprache-Bewußtsein-Tätigkeit, Berlin 1986, S. 22.

(39) Paul Hensel, KANTSTUDIEN 1908 にこの指摘がある。

(40) E. Cassirer, ebenda S. 116.

(41) E. Cassirer, ebenda S. 119.

(42) E. Cassirer, ebenda S. 118, Prozess der Objektivierung.

(43) E. Cassirer, ebenda S. 119, darum behauptet Humboldts Sprachphilosophie ebenso den Primat des Satzes vor dem Wort, wie Kants transzendentale Logik den Primat des Urteils gegenüber dem Begriff behauptet hatte.

(44) Immanuel Kant, Kritik der Urteilskraft, Hamburg 1959, S. 80.

(45) E. Cassirer, ebenda S. 123.

(46) E. Cassirer, ebenda S. 122, ein bloßer Verhältnisausdruck, das objektivierende Prinzip.

(47) Ⅳ 27, ihre（=der Sprachen）Verschiedenheit ist nicht eine von Schallen und Zeichen, sondern eine Verschiedenheit der Weltansichten selbst.

(48) 正確には『言語の発達のさまざまな時代に関する比較的な言語研究について』（Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung）.

(49) Ⅳ 27, die gegenseitige Abhängigkeit des Gedankens, und des Wortes von einander; Verfahren der inneren Wahrnehmung und Schöpfung.

(50) Der Begriff der inneren Form, in: INDOGERMANISCHE FORSCHUNGEN 1923, S. 150-S. 169.

(51) Porzig, ebenda S. 168f, Es gilt, diese verschiedenen"inneren Formen" einer Epoche, einer Kulturgemeinschaft, zueinander in Beziehung zu setzen, zu prüfen, inwieweit sie einheitliche Prinzipien enthalten, d.h. inwieweit das, was wir "Kultur" nennen, wirklich eine verstehbare Einheit ist.

(52) Porzig, ebenda S. 167f.

(53) Porzig, ebenda S. 167, die besondere Art[…], wie ein Künstler den Inhalt des Kunstwerkes aufgefaβt hat, ehe er ihm äuβere Form gab.

(54) Porzig ebenda S. 167f, Der Begriff des Stiles geht über das Individuelle hinaus und schafft soziale und genetische Zusammenhänge.

(55) Porzig, ebenda S. 156,（die positivistische Position führt in ihren Konsequenzen zur）Leugnung eines wissenschaftlich faβbaren Objekts "Sprache" überhaupt.

(56) Porzig ebenda S. 156, die Summe tatsächlicher psychologischer Eigenschaften und Beziehungen […], die eine bestimmte äuβere Form als ihre Wirkungen hervorbringen.

(57) Porzig, ebenda S. 162, Wir suchten aber ja gerade den gesetzlichen Zusammenhang jener objektiven Vorgänge.

(58) Ⅶ 42, Die Sprache ist gleichsam die äuβerliche Erscheinung des Geistes der Völker.

(59) Ⅶ43,（dass）der Bau der Sprachen[…] verschieden ist, weil[…]es die Geisteseigentümlichkeit der Nationen selbst ist.

(60) Ⅶ49,（dass）unter Form der Sprache[…] nicht bloβ die sogenannte grammatische Form verstanden wird.

(61) Ⅶ 47, Das in dieser Arbeit des Geistes, den articulirten Laut zum Gedankenausdruck zu erheben, liegende Beständige und Gleichförmige[…] macht die Form der Sprache aus.

(62) Porzig, ebenda S. 165,（Weiter aber）ist das Sprechen einer Sprache keineswegs bloβ die Anwendung gewisser konventioneller Zeichen, sondern es ist ein beständiges Neuschaffen.

(63) Porzig, ebenda S. 165,（wenn）in jedem Einzelnen der Sprachgemeinschaft ein gewisses formgebendes Prinzip vorhanden ist.

(64) Porzig, ebenda S. 164.

(65) Porzig, ebenda S.165, apriorische Formen der Apperzeption.

(66) Porzig, ebenda S. 167, die mit der äuβeren Sprachform in Wechselwirkung stehenden eigentümlichen Apperzeptionsformen einer Sprachgemeinschaft.

(67) Das Problem der inneren Sprachform und seine Bedeutung für die deutsche Sprache, in: GERMANISCH-ROMANISCHE MONATSSCHRIFT 1926, S. 241-S. 256.

(68) Innere Sprachform als Stil sprachlicher Anverwandlung der Welt, in: STUDIUM GENERALE 1954, S.571-S. 579.

(69) Weisgerber, Das Problem der inneren Sprachform und seine Bedeutung für die deutsche Sprache, S. 244.

(70) Weisgerber, ebenda S. 245, Besitz des Begriffes und Besitz des Namens stehen in[…] Korrelationsverhältnis.

(71) Weisgerber, ebenda S. 247, mit seiner（=des sprachlichen Zeichens）Hilfe.

(72) Weisgerber, ebenda S. 247, Der Mensch gewinnt eine intellectuelle Beherrschung[…] der（Farben）welt.

(73) 福本喜之助，寺川央編訳『現代ドイツ意味理論の源流』大修館書店　1975，74 頁の指摘による。

(74) Ⅶ 176,（dass）die Sprache[…] eine wahre Welt ist, welche der Geist zwischen sich und die Gegenstände durch die innere Arbeit seiner Kraft setzen muss.

(75) Weisgerber, ebenda S. 249,（das）Sprache dem einzelnen Mitglied der Sprachgemeinschaft nicht nur die lautlichen Symbole, die Namen, vermittelt, sondern auch die[…] Begriffe.

(76) Weisgerber, ebenda S. 251, Der einzelne formt sich […] im Banne der in den Begriffen der Sprache niedergelegten Erfahrungen seiner sprachlichen Verfahren.

(77) Weisgerber, ebenda S. 251, Die Sprache liefert uns nicht nur Namen und Begriffe, also die Wörter, sondern auch die Formen, in denen wir diese im Flusse des Gedankens zusammenordnen.

(78) Weisgerber, ebenda S. 251, Schlüssel zur Wertung alles dessen, was in dieser Sprache gedacht und geredet.

(79) Weisgerber, ebenda S. 251,（die Untersuchung der inneren Form einer Sprache, d. h.）ihres begrifflichen Aufbaus und ihrer syntaktischen

Formungsmöglichkeiten.

(80) 例えばⅦ81, 82, 94, 96などをヴァイスゲルバーは挙げている。

(81) Weisgerber, ebenda S. 573, innerstes Gesetz.

(82) Weisgerber, ebenda S. 575.

(83) Weisgerber, ebenda S. 575, Akt der Verwandlung der Welt im Gedanken（Ⅶ 41）.

(84) Weisgerber, ebenda S. 572, geistige Anverwandlung des Seins.

(85) Weisgerber, ebenda S. 573, sprachliche Anverwandlung der Welt.

(86) Weisgerber, ebenda S. 575, Prozeβ des Wortens der Welt.

(87) Weisgerber, ebenda S. 573, Formen der Welterschließung.

(88) Weisgerber, ebenda S. 573, allgemeinmenschlich, gemeinschaftsgebunden, individuell.

(89) Weisgerber, ebenda S. 579, die menschliche Sprachfähigkeit, […]gemeinschaftlich-gesellschaftliche Ausprägung dieser Kraft, […] die individuelle Sprachkraft.

(90) Ⅶ 61f,（Von）dem jedesmal Gesprochenen, die Masse seiner Erzeugnisse.
Ⅶ 59, Sprachvermögen.

(91) Weisgerber, ebenda S. 578,（in der）Wechselwirkung von Muttersprache und Sprachgemeinschaft.

(92) Weisgerber, ebenda S. 574, der Stil der sprachlichen Anverwandlung der Welt durch eine Sprachgemeinschaft.

(93) Weisgerber, ebenda S. 575, die gestaltende Kraft menschlicher Sprachfähigkeit, geschichtlich wirklich geworden in dem durch eine Sprachgemeinschaft immerfort vollzogenen "Akt der Verwandlung der Welt in Gedanken."

(94) Ⅶ 87

(95) Ⅶ86, die strahlende Klarheit[…] mit ihrem Licht und ihrer Wärme.

(96) Ⅶ 48, Einheit und der Odem eines Lebendigen.

(97) Ⅶ 15,（der Sprache,）als eines innerlich zusammenhängenden Organismus.

(98) Ⅶ 97, in unmittelbarem Zusammenhange mit der Geisteskraft, ein vollständig durchgeführter Organismus.

(99) Ⅶ 55.

(100) Ⅶ 55.

(101) Ⅶ 56.

(102) Ⅶ 95, 98.

(103) Ⅶ 87.

(104) 例えば，福本喜之助（『フンボルトの言語思想とその後世への影響』関西大学出版部　1982年，48頁）。更に，注 (39) を参照。

(105) Ⅶ 91,, Gefühl[…] Verstand[…] Geist.

(106) Ⅶ 93, Dichtung und Philosophie.

(107) Immanuel Kant, Kritik der Urteilskraft, Hamburg 1959, S. 28, 65, 69, 145, 193.

(108) Ⅶ 55, Selbsttätigkeit[…] Empfänglichkeit.

(109) Ⅶ 50, Sprachelemente（in geistiger Einheit）.

(110) Ⅶ 211, Begriff und Laut.

(111) Ⅶ 113, Wurzel[…] Suffix.

(112) Ⅶ 50,（in）geistiger Einheit.

(113) Ⅶ 121, Die Worteinheit（in der Sprache）.

(114) Ⅶ 124, Verschmelzung des Begriffs mit dem Laute.

(115) Ⅶ 97, Laut-und Ideenform.

(116) Ⅶ96, Synthesis der äuβeren und inneren Sprachform.

(117) A. マルティネ編著『言語学事典』大修館書店 1972, 第18章「言表」を参照。

(118) Ⅶ90,（Begriffs）bildung[…] dem Articulationssinne vorausgehend angesehen.

(119) Ⅶ79, Articulationssinn[…] dem Laute Bedeutung zu geben.

(120) Ⅶ 213, Einheit und Abhängigkeit von einander, zu welcher Suffix und Wurzel verschmolzen sind.

(121) Ⅶ 162, das reine Princip des Sprachbaues.

(122) Ⅶ 213, Act des selbstthätigen Setzens.

(123) Ⅶ 96, Geisteskraft.

(124) Ⅶ 110, das Doppelte.

(125) Ⅶ111, ein Doppeltes, eine Bezeichnung des Begriffs und eine Andeutung der Kategorien, in die er versetzt wird.

(126) Ⅶ 217, dem wahren Begriff der grammatischen Formen.

(127) Ⅶ 163, ein geniales[…] Princip.

(128) Ⅶ 262.

(129) Ⅶ 188.

(130) Ⅶ 210.

(131) Ⅶ 108, Ⅳ 17.

(132) Ⅶ 149, Denkt man sich[…] die Sprachbildung successiv, so muss man ihr […] ein Evolutionssystem unterliegen.

(133) フンボルトの研究家であり,言語学者である泉井久之助も「それほど完全でない」言語に関するフンボルトの結論は「誤り」であるとの意見である。(泉井久之助『言語研究とフンボルト』弘文堂　1976 年，Ⅳ章の 4 「言語の種々性と言語の分類」を参照。)

(134) Ⅶ 42, Die Sprache ist gleichsam die äußerliche Erscheinung des Geistes der Völker; ihre Sprache ist ihr Geist und ihr Geist ihre Sprache, man kann sich beide nie identisch genug denken.

(135) Ⅶ42, […] müssen wir als das reale Erklärungsprincip und als den wahren Bestimmungsgrund der Sprachverschiedenheit die geistige Kraft der Nationen ansehen.

(136) (注) 59 を参照

(137) Ⅶ255, Es lässt sich jedoch […] der Einwand erheben, dass einzelne Vorzüge der Sprache auch einzelne intellectuelle Seiten vorzugsweise auszubilden im Stande sind und dass die geistigen Anlagen der Nationen selbst weit mehr […] verschieden sind, als sie nach Graden abgemessen werden können.

(138) Ⅶ 82, die innere Idee

(139) Ⅶ 86, der intellectuelle Theil der Sprache

(140) Ⅶ 250, der innere Sprachsinn

(141) Ⅶ 82, die innere Idee […] eine Schwierigkeit zu überwinden hat. Diese Schwierigkeit ist der Laut.
Ⅶ 20, das Streben, der Idee der Sprachvollendung Daseyn […] zu gewinnen.

(142) Ⅶ86,(wie der intellectuelle Theil der Sprache) allein auf geistiger Selbsttätigkeit beruht, […] Gleichheit des Zwecks und der Mittel in allen Menschen.

(143) Ⅶ 251, das die Sprache von innen heraus beherrschende, überall den leitenden Impuls gebende Princip.

(144) Ⅶ 52, der von ihr [= der Lautform] […] gemachte Gebrauch.

(145) Otto Funke, Innere Sprachform, Reichenberg 1924, S. 112, durch die Sprachtätigkeit geformte Gedankenwelt.

(146) Louis Hjelmslev, Principes de Grammaire générale, Kφbenhavn 1928, p. 222, Le terme implique, […] une confusion de la signification et de la forme, et une confusion entre la théorie des mots et la théorie des éléments grammaticaux.

(147) ebenda, p. 218, La ≫ forme intérieure ≪ […] le système d'une langue … ≫ le génie de la langue ≪ (Sprachgeist).
S. 219, le terme ≫ intérieure ≪ indique que le concept n'est pas d'ordre linguistique. […] le signe linguistique est entièrement psychique.

(148) Erich Stolte, Wilhelm von Humboldts Begriff der inneren Sprachform, in: ZEITSCHRIFT FÜR PHONETIK UND ALLGEMEINE SPRACHWISSENSCHAFT 1948, S. 206, der geistige Gehalt der äußeren Form.

(149) Hemut Gipper, Wilhelm von Humboldt als Begründer moderner Sprachforschung, in: WIRKENDES WORT 1965, S. 15, Prinzip formender Kraft.

(150) ebenda, S. 15, alles Sprachliche durchdringende Formkraft ; die geistig-inhaltliche Seite der Sprache.

(151) Ⅶ 52, zwei Principe

(152) 注 (116) , (8) を参照。

(153) 注 (115) を参照。

(154) Ⅶ 95, wenn […] der Gedanke dem Laute der Seele einhaucht.

(155) Ⅶ 94, sinnliche[r] Anschauung […] intellectuelle Begriffe.

(156) Ⅶ 42, Ⅶ 176 など。

(157) 『フンボルトの言語研究』(京都大学学術出版会 2001) で斉藤渉は「形式」と「理解」とが相関関係にあることを指摘している (36 頁)。Ⅶ 121, Ⅵ 244 などの引用は『序説』からではないが，すぐれた論である。

(158) I. Kant, Kritik der Urteilskraft, Hamburg 1959, S. XXXVl, Zweckmäßigkeit einer Erfahrungserkenntnis

(159) Edward Spranger, Wilhelm von Humboldt, in: KANTSTUDIEN 1908, S. 65.

(160) ebenda, S. 66, Vorzüglich beschäftigt mich jetzt wieder die Metaphysik. Ich habe mir vorgenommen, eine neue ernstliche Revision meiner eigenen Überzeugungen vorzunehmen, und studiere das Kantische System von vorn an von neuem durch. (22. 8. 1791)

(161) Eva Fiesel, Die Sprachphilosophie der Deutschen Romantik, Tübingen 1927, S. 22, in der immer wiederkehrenden Antithese von äußerer und innerer Sprache.

(162) ebenda, S. 134, der Gegensatz zwischen äußerer und innerer Sprache.

(163) ebenda, S. 131, äußere Offenbarung des inneren

Kraftreiches.

(164) Friedrich Nietzche, Menschliches Allzumenschliches, Ⅱ 131, Stuttgart 1964, S. 237, den Stil verbessern, heist den Gedanken verbessern.

(165) スワヒリ語の正書法では Kitabu changu であるが，複数形がvitabu vyanguであることから判るように，－ch－や－vy－はクラス別の名詞と形容語とを媒介する接辞であり，抱合語としての特質を示している。